

研究ノート

## 韓国のシジミ統計について

### On Korean Statistics of Basket Clams

安 木 新一郎

YASUKI Shinichiro

抄録

韓国の2012年～2022年の国内シジミ漁獲統計とシジミ貿易統計は、インターネット上に公開されているが、統計はまったく信用できない。韓国では、中国産とされるシジミの大部分が北朝鮮産であることはよく知られた事実である。また、シジミとオキシジミの区別もあいまいである。韓国の貿易業者は、北朝鮮産シジミを中国産として輸入し、これをロシア産に偽装して日本へ輸送していると考えられる。

キーワード

シジミ 韓国 北朝鮮 ロシア 産地偽装

## 1 はじめに

2006年10月に日本は北朝鮮との貿易を禁じ、これ以降、北朝鮮産シジミの輸入は統計上ゼロとなった。一方、対北朝鮮貿易の禁止時期から、ロシアからのシジミ輸入が増え、2019年まで、日本の輸入シジミのほとんどはロシア産シジミとなっていた。

2019年にロシアでは、シジミの主要産地である沿海地方ラズドリナヤ河口でのシジミ漁が禁じられたが、奇妙なことに、ロシアから日本への輸出は続いていた。

その後、2020年2月からロシアからのシジミ輸入はほとんどなくなった。同じ時期、2020年1月に新型コロナウイルス感染症の世界的流行により、中国・丹東と北朝鮮・新義州とのあいだの国境貿易が停止した。ロシア産シジミとされるものの大部分は、実は北朝鮮産であったことが推定される<sup>1</sup>。

日本はロシア産シジミを韓国経由で輸入している。そこで、本稿では、韓国の国内シジミ漁獲統計と貿易統計を見ることで、シジミの国際流通の実態について論じる。

韓国の貿易統計上、韓国はシジミを中国から輸入し、ロシア産のシジミは韓国経由で日本へ送り出していることになっているが、まったく信用できない。韓国では中国産として北朝鮮産シジミを輸入していることが広く知られている。

また、シジミの原産地をロシア産と認証しているのは、ロシアではなく韓国の商工会議所であり、信用できないことは日本側も認識している。

北朝鮮産シジミは韓国で中国産に偽装され、これをロシア産に書き換えて日本に輸送し、その一部分が日本国内産として売られていることになる<sup>2</sup>。

二重、三重のシジミ産地偽装は韓国の貿易業者によって組織的に行われ、また韓国政府は事実上、産地偽装を放置している。

シジミの産地偽装は日本のシジミ漁に打撃を与え、また不正に得られた利益は北朝鮮の権力者に献金されていると見られる<sup>3</sup>。日本政府は韓国に対し、シジミの産地偽装を取り締まるよう、強く要求する必要があると考える。

## 2 韓国内の漁獲状況

日本では縄文時代からヤマトシジミとセタシジミが食用とされ、無数の貝塚が

残されている。おそらく 19 世紀後半から淡水性のマシジミが移入し、北海道を除く日本各地でおもに自家消費されていた。また、明治時代以降、島根県の宍道湖のように、人工的に汽水化した場所ができ、ヤマトシジミの産地が増えた。

ところが、高度経済成長期に入ると、淡水性のセタシジミやマシジミの生息数は激減し、各地の汽水域が淡水化あるいは埋め立てられることによってヤマトシジミの漁獲量も減少した。

マシジミは、宍岐や沖縄などで生息が確認されているが、新たに流入したタイワンシジミ類と交雑していつている。マシジミが澄んだ水を好むのに対して、タイワンシジミ類は水田の側溝などへドロの中に密集して生息することもあり<sup>4</sup>、食用としてあまり適していない。現在日本で食べられるシジミのほとんどは汽水性のヤマトシジミである<sup>5</sup>。

朝鮮半島では東三洞貝塚のようにシジミ食の跡が見られるが、これはシジミを食べる縄文人が移住したからであろう。かつて朝鮮半島南部の洛東江、蟾津江、兄山江などは、ヤマトシジミの産地であった。

ただし、現在の韓国では、ヤマトシジミやタイワンシジミ類も食べるが、ソウル周辺ではオキシジミという別種の貝類を好んで食べる傾向がある。ちなみに、日本ではオキシジミはほとんど流通しない。

韓国ではしばしばシジミとオキシジミを混同する。例えば、韓国から日本へオキシジミが輸出されるといった新聞記事<sup>6</sup>が見られるが、明らかな誤解である。

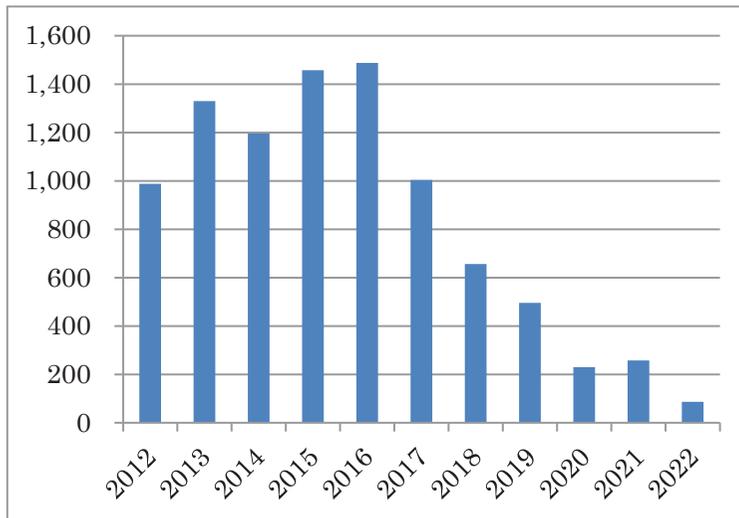
図 1 から分かるように、近年、韓国におけるシジミ漁獲量は急速に減少し、2022 年にはほぼ消滅した。シジミ生息域の水質悪化により、生息数が激減していることと、水銀汚染などにより食用にできなくなっているからだと考えられる。例えば、浦項・兄山江では河口の汽水域から高濃度の水銀が検出されている<sup>7</sup>。

日本の税関は、韓国から輸出されるシジミからエンドスルファンのような残留農薬や<sup>8</sup>、ノロウイルス、A 型肝炎ウイルスなどを検出している。韓国の会社が中国産シジミを使って製造し日本に輸出した製品には動物用医薬品の成分が入っていたこともある。日本の税関では、中国産や韓国産のシジミに対する検査がおこなわれている。

これに対して、ロシア産シジミからは残留農薬等は検出されない<sup>9</sup>ので、検査もあまり行われていないようである。貿易統計上、ロシア産とされるシジミの大部

分は北朝鮮産だと考えられるが、北朝鮮ではあまり農薬が使われていないことがわかる。

図1 韓国のシジミ漁獲量（単位：トン）、2012年～2022年



出所) 韓国統計庁国家統計ポータル KOSIS より筆者作成。

### 3 韓国における産地偽装

北朝鮮から中国へは、陸路、すなわち新義州から丹東に活しじみが輸出されていた。丹東から下関までは36時間で届けることができるので<sup>9</sup>、生きたままあるいは冷蔵のシジミとして日本は輸入している。

これに対して、本物のロシア産シジミは冷凍してから輸入する。例えば、2000年にロシア産シジミを取り扱い始めた日本の業者は、ロシア産シジミを冷凍加工して輸入していた。2022年にわずかに樺太から韓国を經由して日本本土に入ってきたシジミも冷凍された物だった。

2020年1月に新型コロナウイルスの蔓延を理由に、中朝国境貿易が停止すると、翌2月から日本のロシア産シジミ輸入がゼロになった。韓国の業者は、北朝鮮産シジミを中国産と偽って輸入し、今度はロシア産に偽装して日本に輸出していると考えられる。

韓国の貿易統計上、2012年～2022年まで、北朝鮮からのシジミ輸入はゼロだ

が、韓国の業者にとって、北朝鮮産シジミの流入が途絶えていないことは常識である<sup>10</sup>。

図 2 を見ると、2020 年 2 月の中朝貿易の停止後、中国から韓国へのシジミ輸出は急減している。中国産シジミの多くが北朝鮮産であったことはほぼ間違いない。

韓国の業者がシジミを北朝鮮産と表記しないのは、対北朝鮮貿易規制があるからだ。日本に運ぶ際、ロシア産に偽装するのは、中国産や韓国産だと日本の税関の検査が厳しいが、ロシア産だとあまり検査されないからだと思われる<sup>11</sup>。

韓国ではロシア産シジミの産地証明を韓国の商工会議所が出しており、日本側も把握していて、産地証明や税関申告書が信用できない状態にある<sup>12</sup>。

図 2 韓国シジミ貿易統計（単位：トン）、2012 年～2022 年

		2012	2013	2014	2015	2016	2017
輸入	中国	4,991	4,707	4,736	4,817	4,460	4,021
	ロシア	0	0	0	0	5	0
輸出	日本	38	301	82	21	0	0
	その他	0	0	0	0	0	0
		2018	2019	2020	2021	2022	
輸入	中国	3,878	3,732	955	73	242	
	ロシア	0	0	0	0	0	
輸出	日本	0	1	0	191	98	
	その他	0	0	1	0	0	

出所) 韓国貿易協会 K-stat より筆者作成。

#### 4 おわりに

韓国のシジミ統計と韓国内のシジミ漁獲・流通の実態を総合して考えると、次のようなことが推定される。

2006 年 10 月に日本が北朝鮮からのシジミ輸入を止めると、江原道・束草などにいる北朝鮮と関係の深い韓国の貿易業者は、北朝鮮産シジミを中国産に偽装し

て輸入し、最初は中国産として日本へ送っていたが、日本側が摘発すると、これ以降ロシア産に再偽装して日本へ運ぶようになった。また、韓国産あるいは中国産と表示すると、日本での通関時に検査が余計にかかるから、ロシア産に再偽装しているものと考えられる。

韓国内でもシジミは消費されるが、国内漁獲量は激減し、また本物の中国産淡水性シジミの輸入が難しい中、中国産に偽装された北朝鮮産シジミへの依存度が大きくなっていった。

ここ2、3年、韓国内ではあまり獲れず、北朝鮮からも中国からもシジミ輸入が激減したにもかかわらず、韓国内ではあまり話題になっていないように思える。そもそも朝鮮半島は、日本、台湾、ベトナム、カンボジアなどのようなシジミをさかんに食べる地域ではなく、日本の影響で食べるようになったと考えられる。

今後の課題としては、韓国の貿易業者が、どのようにして北朝鮮産シジミをロシア産に偽装していったのか、という点を解明することにある。

日本へシジミを運ぶ際、日本の税関に韓国の業者はロシアの正式な形式の税関申告書を提示する。沿海地方産のシジミであれば、ウラジオストク税関の印があるはずだが、樺太・ユジノサハリンスク（豊原）税関の印が押されている。

2022年に樺太中部・来知志湖（アインスコエ湖）で獲れたヤマトシジミを韓国経由で日本に輸出した実績があるが、漁獲や輸出には朝鮮系と思われる姓を持つロシア人が関わっている。沿海地方や樺太には3万人以上の朝鮮系住民がいるが、1937年にスターリンによって中央アジアへ強制移住させられた人々の子孫が帰還したのが沿海地方の極東朝鮮人であり、シジミに関心がない。

これに対して、ソ連の不法占領下で樺太に残留した日本人と朝鮮人の子孫が樺太の朝鮮人で、彼らはシジミを獲り食べている。シジミは豊原の市場で冷凍して売られており、また、輸出時も冷凍される。北朝鮮産は活シジミなので区別が付きやすい。

江原道は北朝鮮国境にあるのと同時に、ロシアとは貨客船航路でつながっている。また、ロシアの港から中国・吉林省・延辺朝鮮族自治州に行くことができる。中国、ロシア、韓国、北朝鮮を結びつける地の商工会議所が、シジミの産地偽装に深く関わっている点は注目した方がいいと考える。

韓国の貿易業者がロシアの正式な税関申告書をどのようにして手に入れている

のか、興味は尽きない。

#### 付記

本稿は科研費基盤研究（B）22H03845「言語圏地域市場の形成・統合・再編に関する研究：ロシア語圏市場に焦点を当てて」（研究代表者：徳永昌弘・関西大学商学部教授）の成果の一部である。

#### 注

- 
- 1 安木新一郎（2022）「2011年～2021年シジミ統計について」『函館大学論究』、54（1）、15頁～22頁。
  - 2 2022年12月21日、北朝鮮から不正に輸入したシジミを国産と偽って販売したとして、山口県警などは、不正競争防止法違反の疑いで、下関市の商社アイコーなど数十か所を家宅捜索した（『産経新聞』、2022年12月22日付）。
  - 3 第161回国会・北朝鮮による拉致問題等に関する特別委員会・第2号（平成16年12月2日（木曜日）において、安倍晋三委員（当時）は、「ズワイガニの日本向けの輸出あるいはシジミ等の輸出には特定のある人物がその利権を握っていて、その人物はその上がりを北朝鮮に、これは献金という形で金正日政権に献金をしている。」と述べている。
  - 4 安木新一郎（2013）「休耕田におけるセタシジミの栽培可能性について」『国際研究論叢』、27（1）、85頁～89頁。安木新一郎（2014）「京都府精華町におけるタイワンシジミの侵入状況」『国際研究論叢』、27（2）、71頁～74頁。
  - 5 ベトナム中部フエではシジミがよく食べられ、日本と同じく、シジミの出汁を好む。これに対して、カンボジア、台湾、ロシア沿海地方では出汁を重視しない。カンボジアの中央部に位置するトンレサップ湖では、シジミを茹でて取り出したむき身に唐辛子や砂糖などをまぶして食べる。トンレサップ湖のシジミについては、14世紀に元朝（モンゴル帝国）からの使者が目撃しており、古くから食用とされてきたと思われる。また、この使者の出身地は福建省で、福建人もまたシジミを食べてきた。福建人が移住した台湾では、現在、花蓮でタイワンシジミ類が養殖され、台湾で消費されるだけでなく、日本にも輸出されている。漢籍史料によると、倭人は海南島にいて、徐々に長江下流域に移動したようである。日本列島、中国南部の沿岸地域、もともとチャム人が多く住んでいたベトナム中部、カンボジアでシジミ食文化が共通して見られるのは、倭人の移住過程を考える上で重要だろう。
  - 6 『朝鮮日報』、日本語版、2011年1月3日付。
  - 7 水俣病センター相思社ホームページ、[soshisha.org](http://soshisha.org)。
  - 8 『読売新聞』、2007年7月30日付。
  - 9 釜関フェリーホームページ（日本語）。

---

<sup>10</sup> 『朝鮮日報』、日本語版、2011年1月3日付。

<sup>11</sup> 本稿では、韓国の貿易統計上、中国からの輸入シジミの一定部分が、日本にロシア産として運ばれていたと考えている。例えば、2016年の中国からの輸入シジミと韓国産シジミの総量は約6,000トンである。同じ年の日本の国内漁獲量と輸入量の合計から国内産地への偽装分を引くと約12,000トンと推計できる(安木、2022)。日本に比べシジミ食があまり盛んではなく、かつ人口が半分未満の韓国で、年間6,000トンのシジミが供給されていたというのは奇異に思える。中国から入ってきた活シジミ4,460トンのうち、2,000トン程度(日本国財務省貿易統計による。ロシア産2,648トンのうち、300トン~500トンは本物のロシア産)がロシア産に偽装されて丹東から日本に直接送られていたと考えられる。

<sup>12</sup> 『朝鮮日報』、日本語版、2011年1月3日付。